

研究活動

下西 忠

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要	編者・著者名 (共著の場合 のみ記入)	該当頁数
(著書)						
1. 高野山関係 日本文学選	共著	1981.4 (昭和56年4月)	高野山大学出版部	担当部分 作品の解説(説話集の部分)と年譜。 高野山関係の日本文学(古典)の本文の紹介と解説。	大取一馬・ 鈴木徳男 下西 忠	
2. 日本文学史辞典	共著	1983.9 (昭和58年9月)	京都書房	担当部分 中世紀日本文学の項目 海道記・東関紀行など		
3. 高野山大学選書(1巻)	共著	2006.9 (平成18年9月)	小学館	担当執筆 高野山と文学 平安時代の高野山に関する和歌と、 平家物語に描かれた高野山とのかかわりを考察したもの。		
4. 密教と説話文学	単著	2008.3 (平成20年3月)	高野山大学	高野山大学通信制大学院のテキスト に使うために書き下ろしたもの。 仏教説話と世俗説話、説話の魅力、 因果応報譚、沙石集の世界、発心集 の世界など		400字詰め 原稿用紙で 約420枚
5. 御詠歌でめぐる四国 八十八ヶ所	単著	2009.12 (平成21年12月)	明石書店	四国遍路の旅に誘われ、仏を思い浄土を 歌った人々。巡礼の寺に残された御詠歌 に日本人のこころをよむ。なお、巻末に 参拝時の勤行で唱える経文・御詠歌を付 録CDに収録している。		216頁
6. 仏教と差別 —佐々木兼俊の歩んだ道—	共著	2010.6 (平成22年6月)	明石書店	同和問題に取り組んだ真言宗のむ僧侶の 生きざまを浮き彫りにしたもの。 一章 佐々木兼俊師へのメッセージ 二章 佐々木兼俊師 口述録 三章 仏教と差別に寄せて なお、三章で「沙石集」に表れた非人 という論題で論文を載せている。	小笠原正・ 山口幸照 と3人での編著	233頁
その他 (学術論文)						
1. 『沙石集抜書』の方法	単著	1975.4 (昭和50年4月)	『中世文芸論稿』1	中世の仏教説話集沙石集を室町時代 に存海が抜書したもので、その抜書の 意図・方法を論じたもの。		13頁
2. 『沙石集』の享受史	単著	1976.1 (昭和51年1月)	修士論文	沙石集の室町～江戸時代に至る享受 史を論じたもの。(仏書としての性格 を濃厚にしていった過程をのべる)		400字詰め 120枚
3. 『聖財集』における説話	単著	1976.4 (昭和51年4月)	『中世文芸論稿』2	無任の仏書聖財集にある説話と他の 説話集との関連を論じる。		9頁
4. 無任『雲鏡』における 一、二の問題	単著	1977.5 (昭和52年6月)	『中世文芸論稿』3	仮名法語『雲鏡』の説話と教説の関 係を主に論じる。		10頁
5. 貞慶『表白集』について の一考察	単著	1978.5 (昭和53年5月)	『中世文芸論稿』4	祈雨表白の文章の妙を論じる。		11頁
6. 『沙石集』と無任	単著	1979.3 (昭和54年3月)	『国文学論叢』24	広本系と略本系の成立における無任 の心境の変化を論じる。		22頁
7. 聖護院蔵『海道記』管見	単著	1979.5 (昭和54年5月)	『中世文芸論稿』5	新出の聖護院『海道記』の紹介。 (特に傍訓について論じる)		14頁
8. 『海道記』の注釈的研究 序説	単著	1982.3 (昭和57年3月)	『高野山大学国語国 文』8	海道記の一節の注釈(本文的注釈) を通して海道記の本文研究のありかた をしめたもの。		12頁
9. 説話とその姿容 —『日本霊異記』中巻第三 話を中心に—	単著	1983.4 (昭和58年4月)	『龍谷大学大学院紀 要』(第4集)	龍大本『言泉集』中の霊異記の説話 と霊異記諸本の本文を比較し、説話の 姿容を論じたもの。		8頁
10. 『東関紀行』の表現	単著	1983.11 (昭和58年11月)	『中世文芸論稿』8 中世文芸談話会	紀行文学には一種の表現上の類型化 がみられるが、東関紀行の場合のそれ を論じる。		11頁
11. 『東関紀行』の和歌	単著	1984.2 (昭和59年2月)	『高野山大学論叢』 19	旅情を平明に詠み込む方法と修辭に ついては掛詞の多用が特徴であると結		16頁

12. 『海道記』語彙考(一)	単著	1984.12 (昭和59年12月)	『高野山大学国語国 文』9.10合併号	論づける。 海道記の漢語の難解な語・表現の新 解釈を試みる。		9頁
13. 『海道記』語彙考(二)	単著	1985.11 (昭和60年11月)	『中世文芸論稿』9	同上		10頁
14. 『海道記』の説話	単著	1986.9 (昭和61年9月)	『密教文化』155 高野山大学	承久の乱の犠牲者の逸話とか土地に 関係する故事等がこの紀行の説話の特 徴を述べる。		21頁
15. 『海道記』語彙考(三)	単著	1986.12 (昭和61年12月)	『高野山大学国語国 文』12.13合併号	海道記の漢語の難解な語・表現の新 解釈を試みる。		8頁
16. 藤原基俊詩注(一)	共著	1987.12 (昭和62年12月)	『高野山大学国語国 文』14	担当部分 本朝無題詩にある基俊詩の注釈。 平安時代の代表的な歌人基俊の漢詩 を注釈し、彼の文業にせまろうとす る。	北山円正・ 鈴木徳男 下西 忠	9頁
17. 『海道記』にあらわれた 情感	単著	1988.3 (昭和63年3月)	『国文学論叢』33 石原清志先生退職記 念号	海道記にあらわれた中世の「あは れ」の特質を論じる。		10頁
18. 藤原基俊詩注(二)	共著	1989.1 (平成元年1月)	『密教文化』164 高野山大学	海道記の漢語の難解な語・表現の新 解釈を試みる。	同上	13頁
19. 聖護院本『海道記』(一)	単著	1989.2 (平成元年2月)	『高野山大学論叢』 24	かつて紹介した聖護院本(古写本) とは別に近世の筆になる写本が新たに 発見された。その本文の翻刻。		16頁
20. 藤原基俊詩注(三)	共著	1989.3 (平成元年3月)	『密教文化』166 高野山大学	論文15と同	同上	14頁
21. 『海道記』の方法 —ことばあそび—	単著	1989.12 (平成元年12月)	『高野山大学国語国 文』15	紀行文学の特質の一つに言語遊戯な るものがあるということを歌枕として 有名な八橋を中心に論じたもの。		17頁
22. 藤原基俊詩注(四)	共著	1990.2 (平成2年2月)	『密教文化』169 高野山大学	論文15と同。	同上	23頁
23. 藤原基俊詩注(五)	共著	1991.3 (平成3年3月)	『密教文化』174 高野山大学	同上		17頁
24. 『海道記』の言語遊戯 —八橋の章段を 中心として—	単著	1991.2 (平成3年2月)	『密教文化』173 高野山大学	紀行文学には伝統的に「ことばのあ そび」があると思われるが、海道記の 場合を歌枕八橋を例にあげ論じたも の。		17頁
25. 藤原基俊詩注(六)	共著	1991.12 (平成3年12月)	『密教文化』177 高野山大学	論文15と同。	同上	16頁
26. 藤原基俊詩注(七)	共著	1992.10 (平成4年10月)	『密教文化』180 高野山大学	同上		19頁
27. 『海道記』の和歌	単著	1992.12 (平成4年12月)	『高野山大学国語国 文』17・18・19合併 号	海道記の作者は専門的な歌人ではな いが、紀行文学という枠組み(制約) においての限界を考慮に入れても評価 すべき和歌があることを述べたもの。		19頁
28. 『源平盛衰記』における 維盛—出家・入水につ いて—	単著	1993.3 (平成5年3月)	『高野山大学論叢』 28	平維盛の描き方においては「あは れ」という点では平家物語と同様だ が、小松家の悲劇を基軸にして平氏嫡 流に対するより深い同情がこの作品に はあらわれていると述べる。		9頁
29. 藤原基俊詩注(八)	共著	1993.12 (平成5年12月)	『密教文化』184 高野山大学	論文15と同。	同上	19頁
30. 日記から紀行へ —飛鳥井雅有を通して—	単著	1994.3 (平成6年3月)	『高野山大学国語国 文』20	日記と紀行の「境い目」に一体どの あたりにあるのかということの中世の 作品『春の深山路』をとりあげて論じ たもの。		14頁
31. 聖護院本『海道記』 (二)		1995.2 (平成7年2月)	『高野山大学論叢』 30	作品中の語句と表現の解釈的研究。		14頁
32. 藤原基俊詩注(九)	共著	1995.6 (平成7年6月)	『密教文化』191	論文15と同。	同上	19頁
33. 旅立ちと都 — 『十六夜	単著	1996.9	『高野山大学創立百	阿仏尼の旅立ちつまり都を出立する		10頁

	日記』の本文をめぐって一		(平成8年9月)	十周年記念高野山大学論文集』	部分の解釈を試みる。「草はかへしつ」の「は」の使い方を通して、作者阿仏尼の心情等を述べる。		
34.	藤原基俊詩注(十)	共著	1997.3 (平成9年3月)	『密教文化』198 高野山大学	論文15と同。	同上	14頁
35.	忠盛歌の一考察	単著	1999.2 (平成11年2月)	『高野山大学論叢』 34	忠盛集にある「うれしども」という和歌が、中世の多くの説話集(例十訓抄)の石清水の歌徳説話に影響を与えたという内容。また龍大本の忠盛集の紹介。		15頁
36.	『十六夜日記』の文章	単著	2001.3 (平成13年3月)	国語国文 23~26合併号	一般に『十六夜日記』の文章は短文で紀行文学としての文章としては「味気」のないものだといわれている。しかし必ずしもすべてがそうではなく、ムダをはぶき研ぎ落とされた文章とも言える。その点を具体的に論証したものである。あわせて今治河野美術館所蔵の『十六夜日記』伝本を紹介している。		12頁
37.	独断人間 北條民雄 一病といのち一	単著	2003.2 (平成15年2月)	『高野山大学論叢』 38	ハンセン病とたたかった北條民雄の心の軌跡を年譜をたどりながら詳述する。また『いのちの初夜』に現れた現実志向をもふれている。島木健作と川端の名作『雪国』に与えた影響の大きさも議論として述べている。		17頁
38.	中世の高野の聖僧たち 一奇行に潜む純粋さ一	単著	2003.3 (平成15年3月)	『密教文化』210	一見奇行に見える高野山の僧をとりあげ、その内面にある純粋性をとりあげた。とりわけ『徒然草』106段の「高野の証空上人」はそれが顕著であることを示した。		19頁
39.	四国八十八カ所御詠歌の 考察(上)一成立の周辺 と作者について一	単著	2005.2 (平成17年2月)	『高野山大学論叢』 40	17世紀後半に死去したと思われる真念が御詠歌の成立に深く関与していたものと推察している。つまり、88首のうち「歌」とか「詠歌」と『四国遍路道指南』に書かれているのが真念自詠としている。ま和歌と「唱える」という関係についても考察している。		24頁
40.	持経者叡実の慈悲行	単著	2008.2 (平成20年2月)	『高野山大学論争』 43	平安時代の僧侶、叡実の善行を説話集のなかから抽出し、叡実の人間的なすばらしさを論述したもの。人間平等の観点から天皇よりも貧しい病人を看病した叡実を通して弱者の救済が時代とともに貴族から僧侶へと移行する過程を考察している。		17頁
41.	国語教材と文学研究 一古文入門教材 (児の空寝)の解釈	単著	2009.2 (平成21年2月)	『高野山大学論争』 44	高校1年生の教材をどのように教えるか、古文の魅力をどう伝えるかを具体的に、敬語の使い方を通して、考察したもの。とくに敬語の使い方を通して、稚児の心理に迫る。		
その他							
1.	無住における虚受信施	単著	1974.2 (昭和49年2月)	柴のいほり	妻鏡にみる虚受信施の記述の意味についての小考。		6頁
2.	和歌短評(海道記所収歌)(一)	単著	1988.3 (昭和63年3月)		海道記中の和歌の寸評。		
3.	歴代本願寺派宗主の文学活動の総合的研究(Ⅱ)	共著	1990.2 (平成2年2月)	『仏教文化研究室紀要』28 仏教文化研究所 龍谷大学	西本願寺の歴史の門主の和歌を主とした文学活動などを紹介考察を加えたもの。	大取一馬・ 下西 忠	
4.	平家物語(一)~(四)	共著	1993.3 (平成5年3月)	『龍谷大学善本叢書』13 思文閣	編集協力:担当は巻10の部分 龍大の善本叢書として龍大本『平家物語』を影印として刊行するにあたり岩波の大本(龍大本が底本)の翻刻のあやまり等を一部修正した。		
5.	四十人集(全3冊)	共著	1998.3 (平成10年3月)	『龍谷大学善本叢書』18 思文閣	大取一馬・下西 忠・安井重雄・石原清志など13名。 担当部分		

6. 日本文学にみられる 生死観	共著	1999. 3 (平成11年3月)	「生と死」いのちを 考える	平忠盛集の部分。 龍谷大学蔵の貴重本の紹介の一つと して刊行されたもの。  『平家物語』の中の小宰相の死と建 礼門院の死の意味を考えたもの。
7 中世文学と高野山 シンポジウム基調講演要旨		2006. 3 (平成18年3月)	密教文化 216号	高野と教長の和歌、西行歌、「場」としての 高野を三つに分類し説明したもの。

学会等および社会における主な活動（2000年度以降）		下西
高野山大学国文学会（2000. 11） 平成12年11月	発表 題目 『十六夜日記』の文章とその特質	
高野山大学 同和研究会（2000） 平成12年	発表 題目 「病と文学」	
高野山大学 同和研究会（2001） 平成13年	発表 題目 北條民雄『いのちの初夜』—人権問題に関連して—	
高野山大学 同和研究会（2002） 平成14年	発表 題目 クロウン問題と文学—中島らもの世界—	
日本社会文学 秋季大会 （於 高野山大学 2002. 11） 平成14年11月	企画・運営等にたずさわる。 高野山を含む宗教聖地について世界遺産を登録申請中に際し、 本学においてテーマを高野山・熊野にしぼり、文学・歴史などを 機軸に作家 津本 陽、多くの研究者、一般の人も含めて「高野山」 を理解してもらうべく開催したものである。	
大阪 太融寺における講義 （2001. 4）平成13年4月	題目は「平家物語と維盛」	
高野山大学 夏期公開講座 （2002. 8）平成14年8月	高野山と日本文学—平家物語を中心に—	
CS放送 「心の時間」 スカイパフェクトTV（平成14年）	2002年度 合計5回（1回の放送は15分）にわたり、文学の心、 平家物語を通して、人々の様々な心のあり方を探った。	
講演 京都正覚寺（2004. 7） 平成16年8月	平家物語の世界 京都新聞から取材あり。	
講演 桜池院（2004. 8） 平成16年8月	静岡の信者をあつめてのもの。内容は平家物語の「横笛」。	
高野山学（2005. 5） 平成17年5月	町立公民館にておこなう。高野山と日本文学	
密教研究会 基調講演 （2005・8）平成17年8月	テーマは「高野へのあこがれ」文学における「場」 としての高野を論じる	
高野山大学 同和研究会 （2006・6）平成18年6月	明治期における障害者—福澤諭吉と広津柳浪を中心として—	
高野山大学 同和研究会 （2006・12）平成18年12月	菊池寛『藤十郎の恋』の成立—芥川龍之介たちの 菊池に対する偏見・先入観—	
第二回 南海沿線文化セミナー 於 なんばパークス（2008・9） 平成20年9月	高野山と『平家物語』と題して約90分講演した。参加者約200名。 巻10の「横笛」の章段を中心に高野山が物語成立に大きく 関わったことを論じた。	
説話の魅力（2009. 5） 平成21年5月	高野山東京別院での講演。説話をどのように理解解釈 するかという問題にする。	
高野山学（2009. 10）	「四国88ヵ所御詠歌の成立」	
御詠歌の成立（2009. 10） 平成21年10月	毎年高野町主催の「高野山学」での講演。現在の御詠歌 の成立を17世紀初頭説を主張する。	
来世にあこがれて 於 なんばパークス（2010・7） 平成22年7月	補陀落信仰と御詠歌とのかかわりを西国33ヶ所札所の1番、 3番の札所を通して考察したもの。	
高野山学（2010. 7）	「和歌即仏道」歌聖西行の世界	
和歌即仏道—西行の世界—	毎年の「高野山学」での講演。西行の和歌の特質を考察したもの。	

於 高野山大学 (2010.7) 平成22年7月	自然の対象を眺めることによって、自己を凝視する西行像を あきらかにしたもの。
和歌山コンソーシアム	「中世説話集に見える笑い」

大学行政への係わり (所属委員会)	
平成13年度 (2001年)	教職課程委員会 図書館協議会 自己点検運営委員会 自己点検基本事項検討委員会委員長 公開講座委員会 同和研究会 FD検討委員会
平成14年度 (2002年)	自己点検・評価運営委員会 自己点検・評価検討委員会 教職課程担当者会議 FD問題検討会議 生涯学習委員会 (公開講座) 同和研究会
平成15年度 (2003年)	リエゾンオフィス 自己点検・評価運営委員会 自己点検・評価検討委員会 教職課程担当者会議 生涯学習委員会
平成16年度 (2004年)	リエゾンオフィス 自己点検・評価運営委員会 教職課程担 当者会議 日本文化学科主任
平成17年度 (2005年)	リエゾンオフィス 自己点検・評価運営委員会 教職課程担 当者会議 学生募集対策委員会 同和研究会 日本文化学科主任
平成18年度 (2006年)	リエゾンオフィス 自己点検・評価運営委員会 自己点検・評価 検討委員会 教職課程担当者会議 学生募集対策委員会 日本文 化学科主任 生涯学習担当 同和研究会 入学試験委員会 教務 委員会 科目等履修生選考会議
平成19年度 (2007年)	学生募集戦略本部 日本文化学科主任 教職課程担当者会議 教 務委員会 学生部協議会 学生募集本部 入学試験委員会 科目 等履修生選考会議
平成20年度 (2008年)	学生募集戦略本部 日本文化学科主任 学生部協議会 教務委員 会
平成21年度 (2009年)	学長室長 学生部協議会 教員資格審査委員会 文学部改組に関 わる全学協議会 東京事務所担当
平成22年度 (2010年)	学長室長 学生部協議会 東京事務所担当 密教文化研究所協議 会 密教文化研究所兼任研究所員

所属	文学部	職名	教授	氏名	下西 忠	大学院の授業担当の有無 (有)
教育活動						
教育上の主な業績		年月日	概 要			
1. 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)		2002～2009 (平成14年-平成21年)	<p>課題演習(卒論指導)は毎時間情報処理室でコンピュータを使用しながら指導している。また授業全体を通して「わかる」授業を試みている。そのための副教材も使用している。</p> <p>学生による授業評価(FD委員会)の第一回目は単純平均は4.5(五段階評価)であった。ただ二回目は4.2で下がっている。とくに板書の項目の下がりかたが大きかった。二回を通して一番評価が高かった項目は教員の熱意の項目(4.9と4.8)であった。</p>			
2. 作成した教科書、 教材、参考書		2000. 3 (平成12年3月)	①『敬語の使い方とその本質』(講義名は「国文法」)1年間敬語に絞って敬語の使い方(正しい使い方、誤用を実際の用例に則して詳述したもの。古典の作品の中から敬語のおもしろい用例とか、現代文からの誤用の例などを学生に実践体得してもために問題形式に作成している。(B4、39枚)			
		2001. 3 (平成13年3月)	②『浦島説話の展開』(講義名は「講読演習」)浦島説話(伝承も含む)の文献を網羅し、それが時代的にどのように展開していったかをワークブックの形態をとったものに(B5、42枚、現地で調査した写真含む)			
		2003. 4 (平成15年4月)	③『国文学史』(講義名は右と同じ)古典文学・近現代文学史を略述したもの(A4、154枚)できるだけ作品の原文を鑑賞させるべく高野山にかかる文献を多く紹介しようとしている。			
		2004. 3 (平成16年3月)	④『遍路学』(大学院通信教育テキスト)第四章の「遍路学の諸相」のなかで、西行の四国遍歴を担当する。203～234頁			
		2006. 3 (平成18年3月)	「日本語」(専任教員4名との共同執筆)			
3. 教育方法・教育実践 に関する発表、講演等		2005. 11 (平成17年11月)	香川県の国語科の教員研修会における講演。講演は、国語教材に関する鑑賞の仕方について参加人数は県立・私立ふくめて現任教員約60名於 香川県立高松東高校			
4. その他教育活動上 特記すべき事項		1993～ 現在に至る (平成5年～現在)	龍谷大学(文学部)に非常勤講師として出講。(講座名は「仏教文学」)			
		2001～2007 (平成13年-平成19年)	高大連携として本学の併設校の高野山高校に出講している。特に留学生コースの生徒のため古典の読み方を教授している。			
		2004～ 現在にいたる (平成16年～現在)	高大連携として本学の併設校の高野山高校に出講している。京大コースで古文の授業を担当			
		2006～2009 (平成18年-平成21年)	和歌山県立伊都高校 連携授業			